

Beowulf 120 行目における wiht unhælo の解釈について

On the Interpretation of wiht unhælo in *Beowulf*, l.120

船 井 純 平

抄録

古英詩 *Beowulf* 120 行目で怪物 Grendel を表す形容辞 wiht unhælo に関して, wiht は一般的に “creature” と解釈されている。しかし unhælo については, 校訂本および訳書によって解釈が一致していない。本稿の目的は unhælo の意味を吟味して, wiht unhælo の適切な訳語を検討することである。

古英語文献における unhælu の用例を概観すると, それらが示すこの語の文字通りの意味は, *Beowulf* の多くの校訂本および訳書に示されている “unholy” あるいは “evil” 等の訳語とは乖離したものであることが分かる。また Grendel への言及はキリスト教色が強く見られることが多く, Grendel を表す形容辞も説教集に使用されている語彙がしばしば同じ意味で使用されている。このことから, wiht unhælo の解釈については, 説教集に見られる unhælu の用例の意味を想定することが妥当であると考えられる。*Beowulf* 120 行目の unhælo は, コミュニティ内の Beowulf や Hrothgar を形容する hal 「健やかな」との対比としてコミュニティの外にいる Grendel に使用されており, wiht unhælo には “unhealthy creature” のような訳語が適切であるといえる。

キーワード: 英文学, 古英語, ベーオウルフ

はじめに

古英詩 *Beowulf* の前半は Heorot の館をたびたび襲う怪物 Grendel の退治が主要なテーマとなっており, Grendel の属性や行動がナレーターによって詳しく語られる。120 行目以降では Grendel が Heorot において行った殺戮が以下のように描写されている。

Wiht unhælo,¹⁾

grim ond grædig, gearo sona wæs,

reoc ond reþe, ond on ræste genam

þritig þegna, þanon eft gewat

huðe hremig to ham faran,

mid þære wælfylle wica neosan.²⁾ (ll.120b-125)

残酷で貪欲な *wiht unhælo* は直ちに備えた。野蛮で凶暴な者は寝所で三十人の従士を捕らえ、戦利品に喜んでそこから住处へ向かって、殺戮した多くの者を携えて家路についた。³⁾

引用箇所冒頭における *wiht unhælo* は *Grendel* を表す形容辞であり、名詞の主格 *wiht* と名詞 *unhælu* の属格 *unhælo* の組み合わせにより構成されている。この表現に関して、*wiht* については *Grendel* の存在自体を表すものとして多くの場合 “creature” と訳されており、この部分に関しては解釈上の問題は見られない。一方で *Grendel* を描写している *unhælu* に関しては校訂本や訳書において解釈が一致していない。この単語は *Beowulf* 全体を通して一度しか使用されておらず、また後述するように韻文における用例もわずかであるため、その解釈は困難であるといえる。本稿では古英語文献における *unhælu* の用例および *Beowulf* における *Grendel* に対する形容辞を考察して、*wiht unhælo* の適切な訳語を検討したい。

1. *wiht unhælo* の訳語

解釈が分かれている *unhælu* を含む表現 *wiht unhælo* の訳語は、校訂本や訳書によって様々であるが、それらは以下のようにまとめられる。

- A.J. Wyatt and R.W. Chambers (1925): ‘the creature of evil’⁴⁾
- Fr. Klaeber (1950): ‘creature of evil’⁵⁾
- Johannes Hoops (1965): ‘der Dämon des Unheils’⁶⁾
- Howell D. Chickering (1977): ‘The unholy spirit’⁷⁾
- C.L. Wrenn (1988): ‘The spirit of damnation’⁸⁾
- S.A.J. Bradley (1991): ‘creature beyond redemption’⁹⁾
- John Porter (1993): ‘thing of malice’¹⁰⁾
- Michael Swanton (1997): ‘the creature of damnation’¹¹⁾
- Bruce Mitchell and Fred C. Robinson (1998): ‘[The] creature of evil’¹²⁾
- Ewald Standop (2005): ‘Der unselige “Wicht” (=Dämon)’¹³⁾
- Seamus Heaney (2019): ‘the God-cursed brute’¹⁴⁾

上記の校訂本や訳書が示す *unhælu* の解釈で最も多く見られるものは “unholy”, “damnation”, “beyond redemption” などのような、この語が *Grendel* のキリスト教的な罪や罰に言及しているとするものである。これは該当箇所の直前である 107 行目における *Grendel* が神によって追放された *Caines cynne* (l.107a) 「カインの末裔」であることへの言及や、また *Grendel* は神によって滅ぼされた *eoten* (l.112a) 「巨人族」の血を引くとされていることに根拠を求めることができる。

次に多い解釈が “evil”, “malice”, “Unheil” などのような、この語を *Grendel* がコミュニティに対して害をなしていることへの言及とみなすものである。これは詩の前半において多く描写されている *Grendel* の悪行に合致しており、この解釈に基づく引用箇所において *wiht unhælo* とこれを形容している *grim ond grædig* 「残酷で貪欲な」は、どちらも *Grendel* のコミュニティへの脅威を表現しているということになる。大部分の校訂本および訳書では上記

二つのいずれかの解釈に分類できる訳語を付しているが、Alvin A. Lee は *Beowulf* で使用されている語彙に関する研究書である *Gold-hall and Earth-dragon: Beowulf as Metaphor* の中で、“creature of destruction”, “spirit of damnation” と共に “unhealthy being” の訳語を挙げている。¹⁵⁾ 後者の訳語が与えられることは稀であり、¹⁶⁾ またその根拠も示されていないが、この “unhealthy” の意味は後述するように unhælu の古英語文献における用例に多く見られるものである。

上記の校訂本や訳書の訳語が示すように、問題となっている unhælu の解釈には Grendel の属性も関係してくるが、*Beowulf* 中の Grendel とその母親の描写は早くから研究者によって注目されてきた。J. R. R. Tolkien は怪物としての側面に注目し、キリスト教的な悪魔への過渡期にあるものと考えた。¹⁷⁾ 一方、Joseph L. Baird は追放された人間としての側面を重視し、Grendel には怪物と人間、キリスト教の悪魔と異教の追放者としての側面があるとする。¹⁸⁾ 同様に Andy Orchard による解釈も人間としての側面を強調したものとなっている。Orchard によれば Grendel とその母親は妖怪化しているが、その心理と身体性において *Beowulf* と同じかそれに近いものも付与されており、身体性が心理に比べて描写が少ないのは詩人が意図的に得体の知れないものに対する恐怖心をあおるためであるという。¹⁹⁾

このように Grendel の属性としては怪物あるいは人間のどちらも想定され得るのだが、問題となっている unhælu に対して多くの校訂本や訳書に載っている “unholy”, “damnation” や “evil”, “malice” といった訳語も、神から追放された人間、あるいはコミュニティに害を与える怪物としての属性に関わるものとなっている。unhælu に対して一般的に与えられている上記のような訳語が妥当であるかどうかを考えるにあたり、以下ではまず古英語文献における unhælu の用例を検討したい。

2. 古英語文献における unhælu, unhal の用例

問題となっている unhælu は名詞 hæl に否定の接頭辞が付いたものであり、古英語辞典は hæl に対しては “health”, “safety”, “salvation”, “happiness” の意味を、また形容詞 hal に対しては “whole”, “hale”, “well”, “in good health”, “sound”, “safe” 等の意味を挙げている。²⁰⁾ そしてこの hæl, hal はゴート語 hails, 古高地ドイツ語 heil などと同語源であり、「無傷の、完全な」を意味する印欧語根 kai-lo-(kai-lu-) にさかのぼるものである。²¹⁾ つまり語源的には「完全な状態」hæl, hal が損なわれたものが名詞 unhælu であり、損なわれた状態を表すのが形容詞 unhal であるということになる。

Dictionary of Old English Web Corpus (以下 DOEC) による検索では、名詞 unhælu は古英語文献中で 52 の用例が見られ、²²⁾ 作品における分布からこの語は韻文で使用されることは稀であることが分かる。韻文では冒頭に引用した *Beowulf* の用例以外では、古英詩 *The Seasons for Fasting* の以下の箇所で使用されている。

On þissum fæstenum	is se feorþa dæg
and sixta samod	seofopa getinge
to gelæstanne	lifes ealdre
and to bremenne	boca gerynum

emb þa nigōþan tyd; nan is on eorþan,
 butan hine unhæel an gepreatige,
 þe mot, hæet, oþþe wæt ærur þingan, (ll.79-85)

「この断食の間には4日目と6日目とそれに続く7日目には命の主仕え、9時課には書物の神秘をもって賛美しなければならない。これ以前に食べ物や飲み物をとることのできる者は病気で苦しんでいる者を除いては地上には一人もいない。」

この詩はタイトルが示す通り断食がテーマであるが、引用箇所では四句節における断食の除外規定について言及されている。ここでは *unhælu* は断食を免除される者としての「病人」の意味で使用されており、*Beowulf* を除いた韻文における唯一の用例となっている。

続いて散文の場合にはまず古英語の医学書に複数の用例が見られ、*Old English Herbarium Complex* と呼ばれる *Old English Pharmacopeia* では以下のような記述がある。

Wip ælcer dæges mannes tyddernysse inneweardes nime þonne wegbrædan do on win 7 sup þ wos 7 et þa wegbrædan ðonne deah hit wið æghwylcre innancundre unhælo.²³⁾

“For every days tenderness of a man inwardly, let him take then waybread, put it in wine, and sip the juice and eat the waybread; then it is good for any inward unheal (infirmity).”²⁴⁾

ここでは waybread 「セイヨウオオバコ」の摂取による内臓の痛みに対する治療法が述べられており、*unhælu* は「疾患」を意味している。また同じく古英語の医学書である *Bald's Leechbook* の Book I の中では、腫れ物に対する治療法が書かれている箇所でも *unhælu* が使用されている。該当箇所はいわゆる *metrical charm* と呼ばれるもので、*hafa þu þas unhæle · 7 gewit aweg mid “have thou this unheal, and depart away with it”*²⁵⁾ という文句は病気に対する呪文となっている。この「病気をもって立ち去れ」という表現において *unhælu* は、病気の症状としての腫れ物を示している。

散文では古英語時代の法律文書においても複数の用例が確認できる。Alfred 法典より200年ほど前に制定された Wessex 王国の最初の法典である Ine 法典の第56条では以下の記述が見られる。

Gif mon hwelcne ceap gebygð 7 he ðonne onfinde him hwelce unhælo on binnan XXX nihta, þonne weorpe þone ceap to honda … oððe swerie, þæt he him nan facn on nyste, þa he hine him sealde.²⁶⁾

「或る種の家畜を買った者が、30日以内にその家畜に何らかの瑕疵を発見したときは、その家畜を返還するか、または、売主がそれを買主に売ったときに、いかなる瑕疵の存在も知らなかったことを売主に宣誓させるか、しなければ²⁷⁾ ならない。」²⁸⁾

引用箇所は家畜に関する補償を規定したものであるが、ここでは unhælu は家畜の「瑕疵」を表す語彙として使用されており、この用例はこの語が人間だけではなく動物に対しても用いられることを示すものである。これに加えて法律文書では Ethelred 法典においても用例が確認できる。この法典は 10 世紀後半に王位を継承した Ethelred II により制定されたもので、第 52 条の該当箇所を含む第六法典は、第五、第七から第十法典と同様に専ら宗教的事項に関するものである。²⁹⁾

7 a swa man bið mihtigra her nu for worulde oþþon þurh geþingða hearra on hade, swa sceal he deoppor synna gebetan 7 ælce misdæda deoror agyldan, for þam þe se maga 7 se unmaga ne beoð na gelice, ne ne magon na gelice byrþene ahebban, ne se unhala þe ma þam halum gelice; 7 þy man sceal medmian 7 gescadlice toscadan, ge on godcundan scriftan ge on woroldcundan steoran, ylde 7 geogoþe, welan 7 wædle, hæle 7 unhæle, 7 hada gehwiltne.³⁰⁾

「また、何人も、この国において世俗的にまたは聖職者として高位であればあるほど、常に、罪の償いを十分にし、非行に対する賠償金の支払いも十分にしなければならない。何故ならば、強者と弱者は平等ではなく、同様の負担に耐えないことは、病弱者と健康な者が平等でないのと同様であるからである。したがって、神による償いの賦課においても世俗法による処罰においても、老人と青年に対しても、富裕な人々と貧しい人々に対しても、健康な人々と病弱者に対しても、あらゆる地位階層の人々に対して適切な区別と思慮のある識別がなされなければならない。」³¹⁾

引用箇所は非行に対する賠償金の規定であるが、ここでは形容詞 unhal が hal と、また名詞 unhælu が hæl と並置されて相反する意味を表している。いずれも立場の違う人々に対する賠償規定に言及する際に、健康な人々との対比を示すために病弱者の人々に使用されている。このような用法は 11 世紀前半に制定された Canute 法典においても同様に確認することができる。第二 Canute 法典は世俗社会の幅広い事象を扱っているが、該当箇所である第 68 条は弱者としての病人への援助について言及しており、そこにおいても unhal が hal と並置されている。³²⁾

上記の Ethelred 法典における用例に見られるように名詞 unhælu は形容詞 unhal と同様に使用されることも多い。一方で、古英語文献全体では名詞よりも形容詞の使用頻度が高くなっており、形容詞 unhal の用例数は DOEC による検索では 111 例となっている。この形容詞形も含めた用例の中で最も多いのが、説教集や聖人伝などの宗教書における「病人」への言及である。Ælfric の著作にも多数の用例が見られ、例えば古英語 Lives of Saints では以下の記述において unhal が使用されている。

and þa ealle wurdon swa wundorlice gehælede
binnan feawa dagum . þæt man þær findan ne mihte
fif unhale menn of þam micclan heape.³³⁾ (XXI, ll.153-155)

“And they were all so miraculously healed within a few days, that one could not find there five unsound men out of that great crowd.”³⁴⁾

引用箇所では *unhal* は癒しの対象となる健全ではない状態を表しており、このような文脈における「健全かではない」という意味が説教集や聖人伝などに多く見られる一般的なものである。名詞 *unhælu* および形容詞 *unhal* とともに、このような使用例が多くみられるのは *Wulfstan* や *Ælfric* による説教集などの宗教書であり、名詞では 52 例中の 11 例が説教集におけるものである。

また *unhal* は病気の状態を表す以外に、障害がある状態を表す際にも使用される語彙である。写本 CCC303 に収められている古英語 *Lives of St. Margaret* では、*nan unhælu cild sy geboren, ne crypol, ne dumb, ne deaf, ne blind, ne ungewittes* (ch19) “no unhealthy child be born and no cripple or dumb or deaf or blind or mad child”³⁵⁾ という記述が見られる。引用箇所は祈願文の一部であるが、ここでは様々な障害を表す単語が羅列されており、その総称として *unhal* が使用されている。このように、この語は宗教書において何らかの障害を持った状態を表す語彙としても用いられるものである。

古英語文献における名詞 *unhælu* を形容詞 *unhal* も含めて検討すると、用例が示すのは、これが「完全なものが損なわれた状態」という語源的な意味を土台としたうえで「病人、疾患、障害」などの意味を表す語彙であるということである。アングロ・サクソン人には *hæl* の語源が示すような「完全な状態」のイメージがあり、それが失われている状態全般を表す語彙が *unhælu* であると考えられる。また Karen Anne Bruce も指摘しているように、この語は形容詞 *unhal* と共に病気や障害などの人々の身体的な状態を表すことが多く、道徳的な堕落に使用されることは稀であることも重要である。³⁶⁾ *Beowulf* 120 行目における *unhælu* に対して一般的に与えられている “unholy”, “evil” という訳語は宗教的あるいは道徳的判断に関わる二次的、発展的な意味となっており、古英語文献中の用例においてこの語が示す意味と乖離したものであるといえる。

3. *Beowulf* における Grendel に対する形容辞と *unhælu* の訳語

Edward B. Irving によれば *Beowulf* におけるキリスト教的な要素は、ナレーターによる発言の割合が最も多くその次に *Hrothgar* の発言が多いとのことであるが、³⁷⁾ このことはこの作品の時代設定と深い関係がある。Fred C. Robinson は *Beowulf* という詩の理解に関わる三つの異なる時系列を挙げており、それは次のようなものである。³⁸⁾ 一つ目は作品の舞台である 5 世紀後半から 6 世紀初期であり、二つ目はそれから数世紀後の詩人がこの詩を作った時期であり、そして最後に写字生が現存する写本を書いた紀元 1000 年頃である。つまりこの作品の舞台はキリスト教以前の時代に設定されており、*Beowulf* やその従者による行動や価値観は前キリスト教的、ゲルマン的なものである。一方で、詩人によるナレーターの発言や *Hrothgar* が述べる教訓には、内容は限定的ではあるもののキリスト教的な要素が含まれているのである。このような背景により、作品中に自らの発言が全く存在せず心理描写のすべてをナレーターによって Grendel に関わる描写には、必然的にキリスト教的要素が多くなっている。この背景は、*Beowulf* 120 行目における *unhælu* に対して一般的に与えられている “unholy”, “damnation”

ここで *Beowulf* の中の Grendel を描写する形容辞に改めて注目したい。まず Grendel を表す *feond on helle* (l.101b) 「地獄の悪魔」という表現は DOEC による検索で古英語文献中に 2 例のみ確認でき、*Beowulf* 以外の用例は Wulfstan による説教集の中にある。また *synscaðan* (l.801b) 「罪深い者」は古英語文献中で *Beowulf* に 1 例のみ現れる表現であり、*manscaða* (l.712a, l.737b, l.1339a) 「悪事を働く者」も *Beowulf* において 3 例だけが挙げられるが、これらの表現に共通する第二要素 *scaða* は、*peod-scaða* 「罪人」などの複合語として Wulfstan による説教集等においてしばしば使用されている語彙である。さらに *Beowulf* では *grimma gæst* (l.102a) 「悍猛な悪魔」が 1 例、*ellor-gæst* (l.807b, l.1349a, l.1617a, l.1621b) 「異界の霊」は 4 例が Grendel とその母親に対して使われているが、共通する第二要素 *gast* は *hell-gæst* 「地獄の悪魔」などの複合語として説教集をはじめとする宗教書で用いられるものである。このように Grendel に対するいくつかの形容辞は、説教集に見られる表現がそのままの意味で用いられていることが分かる。すでに述べたように、心理描写を含めてすべてがナレーターによって表現される Grendel の描写にはキリスト教的な要素が目立つのだが、その表現と意味は説教集と共通するものが多い。

Hwilum hie geheton æt hærgtrafum
wigweorþunga, wordum bædon
þæt him gastbona geoce gefremede
wið þeodþream. Swylc wæs þeaw hyra,
hæþenra hyht; (ll.175-79a)

上記のように説教集の中の語彙はしばしば同じ意味で Grendel に対しても用いられているの

であるが、既に述べたように *Beowulf* 全体を通してナレーターによるキリスト教的発言の割合が一番多くなっており、ナレーターによる Grendel への言及に説教集と共通の言い回しが用いられることは不思議ではない。*Beowulf* 120 行目で詩人が用いた *unhælu* に関しても、説教集等の宗教書の用例の意味を想定することは妥当だろう。該当表現は古英語文献における用例にほとんど見られない「神聖ではない、邪悪な」などを意味するというよりも、Lee が挙げている “unhealthy” の訳語が示すように、説教集等の用例に多く見られる「健やかでない」の意味に解釈するほうが適切であると考えられる。

一方で、この表現がどのようなコノテーションを持っていたかについては判断が困難である。中世では病気や障害が罰であると考えられていたとする固定観念は、研究書においてもしばしば見られるが、Joshua R. Eyles によれば最近の研究ではそのような考え方は一部にしか当てはまらないものであることが明らかになっている。⁴¹⁾ しかしながら、Ælfric による *Lives of Saints* にも若い時の虚栄のために首にできた大きな腫瘍についての言及が見られるなど、古英語の宗教書には旧約聖書の記述に基づく上記のような考え方が見られることも事実である。したがって、該当箇所にもネガティブなコノテーションが含まれていた可能性はある。また *unhælu* のコノテーションに関して、K. Bruce Wallace は *unhal* が Ælfric の *Homilies for the Nativity of the Blessed Virgin Mary* の中で旧約聖書に登場する巨人 Goliath に対して使用されていることに注目している。Wallace によれば、Grendel と Goliath に *unhælu*, *unhal* が使用されているのは、*hæl* “whole” を標準とし、そこから欠如あるいは超過しているものが *unhælu*, *unhal* と呼ばれていたためであるとしている。⁴²⁾ Grendel への言及においても語源的な意味をもとにして、標準から外れているというコノテーションが含まれていたと想定することも可能であろう。

Beowulf では、*Beowulf* および Hrothgar をはじめとするコミュニティ内の人々とコミュニティの外にいる Grendel は様々な表現によって対比されている。例えば現代英語ではもっぱら「夢」の意味を表す *dream* は古英語では「楽しみ、歓楽」などを意味する語彙であるが、この語はコミュニティ内の人々の描写と結びつけられる。88 行目では Grendel が襲来する理由となった館で開かれる宴の *dream* 「歓楽の声」が言及され、また 99 行目では人々は *dreamum* 「喜びのうち」に幸せに暮らしていたと述べられる。一方で、コミュニティの外にいてコミュニティを襲撃する Grendel は、*dreamum bedæled* (l.721) 「楽しみを奪われている」や *dreama leas* (l.850) 「喜びを奪われて」、また *dreame bedæled* (l.1275) 「喜びを奪われて」などのように *dream* がない者として描写されている。

問題となっている *unhælu* の形容詞形 *unhal* の対義語である *hal* は、「健やかな、無傷の」という意味で *Beowulf* や Hrothgar に対してしばしば用いられる。300 行目では *hal gedigeð* 「(*Beowulf* は) 戦いを無事に切り抜ける」だろうという予見に *hal* が現れ、また 407 行目では *Beowulf* が Hrothgar へ *Wæs þu, Hroðgar, hal* 「Hrothgar 王よ、健やかでありますように」という言葉をかける場面でも使われている。さらに 1503 行目では Grendel の母親が *Beowulf* の *halan lice* 「健やかな体」を傷つけられなかったと語られ、1973-74 行目では *Beowulf* が *lifigende cwom, heaðolaces hal* 「戦いから無傷で生きて帰ってきた」と述べられている。このように形容詞 *hal* は詩の中でコミュニティ内の *Beowulf* および Hrothgar に対して使用されており、語源的な意味である「完全な状態」をもとにした「(傷などを負わず) 無事である、(病気ではない) 健康な状態」を表している。これらの意味と相反するのが *unhal* 「健やかでな

い」であり、コミュニティの外にいる Grendel は with unhælo 「健やかならざるもの」のように、Beowulf および Hrothgar と対比的に表現されていると考えることができる。この unhælu は、Beowulf では比較的描写が抑えられている Grendel の身体性に関わる形容辞であるといえるだろう。

まとめ

Beowulf 120 行目の unhælu に対して一般的に与えられている “unholy”, “evil” 等の訳語は、古英語文献におけるこの語の用例が示すこの語の意味から乖離したものである。また詩の中で Grendel への言及にはキリスト教色が強く見られることが多く、Grendel を表す形容辞の語句には、しばしば説教集の中で同じ意味で使われているものがある。これらのことから、該当箇所の unhælu については説教集における用例が示す意味と関連付けることが妥当である。コミュニティの外にいる Grendel に対して使用されているこの語は、コミュニティ内の Beowulf および Hrothgar に対して用いられる hal と対比されていると考えられ、Grendel を表す wiht unhælo には “unhealthy creature” のような訳が適切であるといえる。

注

- 1) 引用箇所の冒頭に関して、かつてはいくつかの校訂本において wiht unhælo にピリオドを置き、これを *sorge* のバリエーションとする読み方が提唱されていた。しかしながら *grim ond grædig* から新たな文が始まるのは唐突であることから、現在ではこの句読法が採用されることはなく、wiht unhælo から新しい文を始める校訂が一般的である。
- 2) 本稿における古英詩からの引用はすべて George Philip Krapp and Elliott van Kirk Dobbie, eds., *The Anglo-Saxon Poetic Records: A Collective Edition*, 6vols. (New York: Columbia University Press, 1931-53) に拠った。
- 3) 特に断りのない限り、本稿における古英詩の日本語訳はすべて筆者によるものである。
- 4) A.J. Wyatt ed. *Beowulf with the Finnsburg Fragment*, new ed. revised with introduction and notes by R.W. Chambers (Cambridge: Cambridge University Press, 1925), p. 9.
- 5) Fr. Klaeber, ed., *Beowulf and the fight at Finnsburg*, 3rd. ed. (Lexington: D.C. Heath and Company, 1950), p. 132.
- 6) Johannes Hoops, *Kommentar zum Beowulf* (Heidelberg: Carl Winter, 1965), p. 33.
- 7) Howell D. Chickering, trans., *Beowulf: A Dual-language Edition* (New York: Anchor Books, 1977), p. 55.
- 8) C.L. Wrenn and W.F. Bolton, eds. *Beowulf: With the Finnsburg Fragment*, rev. ed. (Exeter: University of Exeter Press, 1988), p. 283.
- 9) S.A.J. Bradley, *Anglo-Saxon Poetry* (London: Everyman Paperbacks, 1991), p. 414.
- 10) John Porter, *Beowulf: Text and Translation* (Middlesex: Anglo-Saxon Books, 1991), p. 19.
- 11) Michael Swanton, ed. *Beowulf*, rev. ed. (Manchester: Manchester University Press, 1997), p. 41.
- 12) Bruce Mitchell and Fred C. Robinson, eds., *Beowulf: An Edition with Relevant Short Texts*. rev. ed. (Oxford: Blackwell, 1998), p. 52.
- 13) Ewald Standrop ed. *Beowulf: Eine Textauswahl mit Einleitung, Übersetzung, Kommentar und Glossar*, 5 Aufl. (Berlin: De Gruyter, 2005), p. 47.
- 14) Seamus Heaney, trans., Daniel Donoghue, ed. *Beowulf: A Verse Translation*, 2nd ed. (New York: W.W. Norton, 2019), p. 6.

- 15) Alvin A. Lee, *Gold-hall and Earth-dragon: Beowulf as Metaphor* (Toronto: University of Toronto Press, 1998), p. 217.
- 16) この他には Peter Clemoes が 'being of sickness' という訳語を使用しているのみである。Peter Clemoes, *Interactions of Thought and Language in Old English Poetry* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), p. 39 を参照。
- 17) J. R. R. Tolkien, *The Monsters and the Critics, and Other Essays*, Ed. Christopher Tolkien (London: George Allen & Unwin, 1983), pp. 5-48.
- 18) Joseph L. Baird, "Grendel the Exile," *Neuphilologische Mitteilungen* 67 (1966), pp. 375-81.
- 19) Andy Orchard, *Pride and Prodigies: Studies in the Monsters of the Beowulf-Manuscript* (Toronto: University of Toronto Press, 2003), pp. 28-57.
- 20) Joseph Bosworth and T. Northcote Toller, *An Anglo-Saxon dictionary*, (London: Oxford University Press, 1898; supplement by T.N. Toller 1921), p. 499, p. 504 を参照。
- 21) 印欧語族内での関係と印欧語根に関しては Julius Pokorny, *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch*, 2 Bde., 3 Aufl. (Tübingen: Francke Verlag, 1994) および F. Holthausen, *Altenglisches Etymologisches Wörterbuch* (Heidelberg: Carl Winter, 1963) を参照。
- 22) 古英語文献中の用例数については *Dictionary of Old English Web Corpus*, compiled by Antonette diPaolo Healey with John Price Wilkin and Xin Xiang (Toronto: Dictionary of Old English Project, 2009) を参照。
- 23) Oswald T. Cockayne, ed. and trans. *Leechdoms, Wortcunning, and Starcraft of Early England*, 3 vols. Rolls Series 35 (London: Longman, 1864-1866; repr. Chippenham: Thoemmes Press, 2001), vol.1, p. 87. また引用では便宜上、一部の古英語アルファベットをラテンアルファベットで表記している。
- 24) *Ibid.*, vol. 1, p. 87.
- 25) *Ibid.*, vol. 2, p. 77.
- 26) 大沢一雄『アングロ・サクソン (=古英) 法典: 法文の言語 (古英語, 一部ラテン語) の邦訳と注解』東京, 朝日出版, 2010 年, 162 頁。
- 27) 原文では honda の後に数語が抜けていると考えられる。(同上書, 162 頁を参照。)
- 28) 大沢, 前掲書, 162 頁。
- 29) Ethelred 法典については大沢, 前掲書, 350 頁を参照。
- 30) 大沢, 前掲書, 419 頁。
- 31) 大沢, 前掲書, 419-20 頁。
- 32) 7 þi we sculon medemian 7 gescadelice todælan ylde 7 geogoðe, [welige 7 wædle, frige 7 þeowe], hale 7 unhale. 「したがって、我らは、老人と青年、(富者と貧者、自由民と奴隷) 健康者と病人の分限を知り、合理的に区別しなければならない。」(大沢, 前掲書, 508 頁)
- 33) Walter W. Skeat, ed. *Ælfric's Lives of Saints: Being a Set of Sermons on Saints' Days Formerly Observed by the English Church* (London: N. Trübner, 1881), p. 450.
- 34) *Ibid.*, p. 450.
- 35) 古英語 *Lives of St. Margaret* の本文および日本語訳は Mary Clayton and Hugh Magennis, *The Old English Lives of St. Margaret*, Cambridge Studies in Anglo-Saxon England 9 (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), p. 169 を参照。
- 36) Karen Anne Bruce, *Unhælu: Anglo-Saxon Conceptions of Impairment and Disability*, Dissertation Presented in Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree Doctor of Philosophy in the Graduate School of The Ohio State University, 2014, p. 55.
- 37) Edward B. Irving Jr, "The nature of Christianity in *Beowulf*" in Peter Clemoes, Simon Keynes and Michael Lapidge, eds., *Anglo-Saxon England* 13 (Cambridge: Cambridge University Press, 1984), pp. 8-9.
- 38) Fred C. Robinson, *The Tomb of Beowulf and Other Essays on Old English* (Oxford: Blackwell, 1993), p. 36.
- 39) Swanton, p. 190.

- 40) Andy Orchard, *A Critical Companion to Beowulf* (Cambridge: D.S. Brewer, 2003), pp. 151-52.
- 41) Joshua R. Eyler, ed. *Disability in the Middle Ages: Reconsiderations and Reverberations* (London: Routledge, 2016), p. 3.
- 42) K. Bruce Wallace, “Grendel and Goliath: Monstrous Superability and Disability in the Old English Corpus” in Richard H. Godden, Asa Simon Mittman, eds., *Monstrosity, Disability, and the Posthuman in the Medieval and Early Modern World* (Cham: Palgrave Macmillan, 2019), pp. 120-21. * K. Bruce Wallace は注 36) の博士論文の執筆者 Karen Anne Bruce と同一人物である。

